

1	<p>異社会・異文化・異言語に接する中で、印象的な出来事を3つ思い出して「2」の欄に書いてください。その体験に「見出し」をつけるとしたら、下の一欄の国際理解教育の目標項目のどれに当てはまりますか。「2」の番号欄に書いてください。<u>「知識」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の3つの観点から、必ず入るように選んでください。つまり、最低3つの欄は埋めてください。下の一覧にない場合は、自分が考える目標項目を「その他」の欄に書いて、その番号を書いてください。</u></p> <p>◆「知識」 ① 国際友好・平和 ② 文化的多様性と共通性 ③ 相互依存 ④ 正義・公共性 ⑤ 共生 ⑥ 持続可能性 ⑦ 民主主義</p> <p>◆「思考力・判断力・表現力」 ⑧ 偏見・差別・ステレオタイプを見抜く力（批判的思考力） ⑨ コミュニケーション力 ⑩ 課題解決能力 ⑪ 想像力</p> <p>◆「学びに向かう力・人間性」 ⑫ 人権意識 ⑬ 寛容・共感・エポケー ⑭ 協力・協調性 ⑮ 誇り・自尊心 ⑯ 行動・参画 ⑰ グローバルな意識</p> <p>◆その他 (⑱)</p>
2	<p>それはどのような体験から、どのように考えたのですか。</p> <p>番号 ① 【国際友好・平和】 「中国人か？」イランにいるとよく聞かれた質問だ。「日本人だ」と答えると、彼らの態度は一変する。一緒に写真を撮ろうと言ってきたり、SNSでつながろうとしたり、買い物の時は「遠い国からわざわざ来て」とお代をまけてくれたり、タクシー代がただになった時もあった。 イランという国に日本人はあまりプラスのイメージを抱かないかと思う。「イラン・イラク戦争」「イスラム教」など、戦争・紛争、核開発、アメリカとの対立、等の政治的イメージ、馴染みのない宗教観が主な原因だろう。しかし、イランは大変な親日国家であり、イラン人は日本に対して多くのプラスイメージを持っている。私はこれを国際的な片想いであると捉えた。いや、やもすると日本人が勝手に作り出した虚像がイランとの親交を邪魔しているのかもしれない。これはイランにだけにとどまらない日本人特有の対諸外国に対する偏見につながる。正しい知識を身に付けることは真の国際平和と友好に欠かせない大事な要素だ。</p> <p>番号 ⑧ 【偏見・差別・ステレオタイプを見抜く力（批判的思考力）】 偏見・差別、この言葉は私の場合、日本人に向けられる。番号①でも述べたように、日本人がイランに抱くイメージがあまりにもマイナス過ぎるからだ。私がイランで3年間を過ごしたと話すとき多くの人の反応が次の2つ。1つ目がマイナス反応。「大変な国に行きましたね。」「とても怖かったですよ。」もう一つが無反応。どんな国なのか？どこにあるのかすら分からない。もといイランという国に興味・関心を抱かないのだ。日本でのイランのニュースの取り扱いも同じであり、イランにしながら日本のネットニュースを見ると、普段の友好的なところや美味しい料理や美しい文化を取り上げて報道はしない。中東における緊張や米国との対立が主なものになる。その情報が間違っているとも言わないが、少なくともメディアが好むイランの情報に偏りがあるのも間違いない。果たしてこれで本当に国際人としての正しい判断や思考ができるのか疑わしく感じてしまう。 本当に日本人の思考・判断・表現力は正しいの？それは正確な情報に基づいて考えられているの？ メディアリテラシー能力が問われている日本。SNSの情報やネットニュースを自分でどう処理し、どう対応し、何を考えるのか？ 自分で見抜く力を子どもたちには持ってもらいたい。</p> <p>番号 ⑯ 【誇り・自尊心】 「日本は広島や長崎が有名だ。アメリカに核爆弾を2発も落とされた国だ。どうして日本はそんな国と仲良く付き合えるんだ？」「どうしてアメリカが守ってくれると考える？」「イランは戦争でイラクに生物科学兵器を使用された。私はその死体処理をしたが、大変無残なものだったよ。あれを見て、イランとこの先、仲良く付き合えるとは思えない。」こんな会話を現地の人とするたびに、どうして今の日本の形になったのだろうと考えさせられるのと同時に、あの戦争を体験してなお、平和国家として存在する日本に誇りと自尊心を感じることができた。怒りや恨みを残しつつも、平和を希求するのが日本人と憲法でうたってきた。</p>

	<p>その意味を本当に現代の人達がかみしめ、尊い理想を追い求める数少ない国家に住む人間であるという誇りと自尊心を抱けているのか？将来の日本人には、その誇りを抱いて世界にでていってほしいと願う。</p> <p>「日本人でよかったと思う。だって平和であることが一番でしょ。」先の質問に私はそう答えた。</p>
<p>番号</p> <p>⑩</p>	<p>【行動・参画】</p> <p>現地では在住する日本人との交流があったのではないかと思う。イランは当時、核開発問題に揺れ、欧米諸国からのボイコットにあっていたので、在留する企業も少なく、お世辞にもテヘランに住む日本人が多かったとは言えない。それでもなおテヘランに残り、日本との商工業での結びつきを保とうとする心熱い企業の方々や、マスコミ各社、日本大使館を始めとする官公庁の皆さんがいた。もちろん、とりわけ親交があるのは、同じ日本人学校の勤務する各都道府県から参集した先生方とその家族の皆様だ。しかしながら、自分から希望した在が施設勤務であるとしても、その行動力や参画力、企画力にはおのおの差があったのではないだろうか。毎週のように大規模な政治的デモや集会が行われ、朝から大きな音でコーランが流れる。出かけるのに護衛がつくような国ではないものの、警戒心の高まりや宗教的価値観の違いから、自分の行動が制限され、窮屈な思いをした派遣教員も多いかと思う。しかし、そこで尻込みするようでは本当の国際理解につながらない。制限された生活の中で、可能な限りの最大限の行動を生み出すことが大事である。きっとこの思いはイランに派遣された教員だけではないはずである。</p> <p>その一步前に踏み出そうとする気持ち。未知なるものに飛び込もうとする勇氣。我々が子どもたちに将来身に付けてほしい一番のグローバル人材としての素養ではないだろうか。</p>
<p>3</p>	<p>教師として、指導観・教育観は変わりましたか。もし、変わったとしたならば、帰国後どのように生かしていこうと思えますか。</p> <p>自分の経験を「伝える」「教える」だけでは不十分と考えるようになった。どうやって自分事と捉え、自分で考え、判断するかが重要である。正直、イランの情報を与えても、さほど役には立たないだろう。知識としての「そういう国もある。」ではなく、「そういう国の人達と話すときにどうする。」「宗教の話になったら、なんて答える。」「自分の国や故郷をどう伝える。」子どもたちなりに自分で考えて、答えを見つけようとする、世界の人々を理解しようと自分から進み出る、そういった行動力を育むことがグローバル人としての素養にもつながると考えるようになった。</p>
<p>4</p>	<p>自分の体験を、国際理解教育の目標として一般化することができましたか。</p> <p>では、指導のための自分なりの国際理解教育の全体構想図を簡単に考えてみよう。</p> <p>大目標 国際交流について考えよう</p> <p>それを実現するための3つの小目標 (重点化する必要があります！)</p> <p>① <u>知りたいことを自分で質問してみよう (実際にインタビュー) 【知識・理解・情報収集力】</u></p> <p>② <u>共通点や差違、違和感をもとにどう国際交流をするのか友達と話してみよう。 【思考・判断力】</u></p> <p>③ <u>自分の考えを話してみよう。 【表現力・学びに向かう人間性】</u></p>
<p>5</p>	<p>※具体的な指導方針 (こんなことをやってみたい！) (今こんなことをやっている！)</p> <p>6年社会科 (または合科として総合的な学習の時間)</p> <p>第3章 世界の中の日本 1 「日本とつながりの深い国々」</p> <p>7/7 小単元「国際交流について考えよう」</p> <p>単元の流れ</p> <p>★ 事前調査</p> <p>① インタビュー</p> <p>② グループで話し合い (どんな国際交流をするのか自分たちの考えをまとめる)</p> <p>③ 国際交流案を話す</p>